

# 概要報告

実施期日	7月29日(火) 【午後】
部会名	小学校 生活部会

テーマ 『 野菜作りを通して、気付きの質を高める学習活動 』

## 提案概要

「一人ひとりの児童自身の気付きの質を高め、活動や体験を一層充実するための授業展開の工夫・改善」について、野菜作りを通して研究した。1年間を通して身近な野菜（トマト【一人一鉢】、キュウリ、ラッカセイ、クキブロッコリー、ダイコン）を育てることにより、子どもたちが初めて知ったこと、気付いたこと、発見したことなどを友だちと交流することで、植物についての理解を深めたり、広げたりすることができるのではないかと考えた。

実践の中では、言語活動の充実を図った。気付きを友だちと交流したり、観察カードに記録したりして、一人ひとりの気付きを全体で共有し、次時に生かした。また、野菜が成長していく過程を五感で感じ、その都度気付きを交流することで、子どもたちの野菜への思いを高めた。

加えて、「どうしたら、野菜が元気に育つか。」をテーマに、子どもたち同士で関わり合いながら野菜の世話を継続して行ったり、野菜の成長により詳しく気付くように予想を立ててから観察するようにした。また、野菜への興味・関心を高められるような場（朝の会のスピーチなど）を設定したりして、指導方法の工夫をした。

1年間継続した野菜作り活動を通して、子どもたちは、野菜の育つ様子や、野菜によって異なる花の咲き方、野菜が生命を持っていること、野菜も自分も大きくなることに気付くことができた。野菜を好きになったり、給食の野菜（食材）に興味をもったりと、野菜を身近なものとして感じられるようになった。

## 質疑概要 ※グループ協議

Q1. 子どもたちと一緒に苗を買いに行ったのなら、みんな同じトマトの苗を買うのではなく、好きなものを選ばせても良かったのでは。

A. 一人一鉢ミニトマトを栽培したのは、お互いに成長の様子を交流したかったから。成長の時期が大体揃うため、自分と友だちのトマトの成長の様子を比べ、その違いを共有したり、実ができた時に喜び合ったりすることができる。共通教材を一つ持たせて活動させたかった。

Q2. ブロッコリーの育ちは面白いと思うが、なぜブロッコリーを選択したのか。苦手な子も多いのでは。

A. 成長の過程の気付きを持たせたかった。トマトやキュウリは花が咲いた後に結実するが、ラッカセイは花が咲いた後に地面の中で結実する。クキブロッコリーは食べるところが蕾なので題材にした。

Q3. 子どもの気付きに対して、どのように対応していったのか。また、「子どもの気付きを十分生かし切れなかった。」と言っていたが、どのような点でそう感じたのか。

A. その都度、各担任で子どもの話を聞きながら対応していった。担任と気付きのあった子どもたちとは共有をたくさんしていた。気づきを生かし切れていないと感じたのは、ダイコンを栽培している時、他の野菜は目の前で成長の様子が見られるから良かったが、ダイコンは土の中で変化していくためわからなかった。子どもたちは予想を立て、「ダイコンを掘ってみようよ。」という声も上がっていたが、担任4人で相談し、掘って確かめるのは止めた。この時、気付きを生かし切れていないなと感じた。

Q4. 野菜作りに興味・関心を持っていくためのしかけ作りはどうしていたのか。

A. 子どもたちの視野に入るところに、野菜が育っていたことが一番大きかったと思う。学校の環境として、中庭を囲むように教室がある。教室にいながらにして野菜を見ることができたし、観察もしやすかった。他のクラスの栽培活動の様子を見て、意欲喚起にもなった。学年全体で同じ栽培活動に取り組んでいたことも、子どもたちのモチベーションを高めることができていた。

Q5. 観察カードは、どのくらいの頻度で、どんな声かけをして書かせていたのか。

A. 大きな発見があった時に書かせるようにしていた。学年で相談をして、「今日は観察カードを書こう。」として、一日の中で時間をずらして書けるように時間を設定していた。

Q6. 観察カードは、文に時間をかけたのか。それとも絵にかけたのか。

A.その子によって異なる。文が書けていない子もいた。その子もつぶやきはたくさん持っていたので、担任が聞いて記録していた。

## 研究協議概要

### ※グループ協議

- ①児童の気付きや疑問を、どのように教師が整理し授業の中に取り込んでいったらよいのか。（子どもたちの気付きは多岐にわたっている。どこまで担任が受け止め、どこまで子どもに伝えて良いのか。理科にならない程度にするには。）
- 五感の視点を示した観察カードを活用する。観察カードを印刷して配り、一緒に読んで考えていく。
  - とても難しい。例えば、トマトを種から育てている場合と、苗から育てている場合とでも、気付きは違ってくる。
  - 茎・芽などの言葉もわかっていない中だと、整理していくのは難しいのでは。
  - 子どもの実態に合わせて良いのでは。興味が理科的なものであれば、それを大切にしたいと思う。子どもたちの興味・関心はどんどん広がっていくので、ブレーキはかけられない。
  - 教師が生活科と理科でねらうことの違いを押さえておくことが大事。
  - 必要な用語（芽、茎、双葉など）は、情報として教えるだけでもよいのでは。
  - 気付きを生かすとすると難しい。疑問を共有するだけでも良いのでは。
  - 子どもの気付きや考えを伝え合う場を設定することで、教師が整理しなくても深まっていくのでは。
  - 子どもにどう気付きさせるかが難しく、気付きや疑問を整理するところまでいけないのでは。
- ②植物の成長のどこに（花・種・実・根）焦点をあてて、気付きを高めていくことができるか。（今回の提案では「花の付き方」に焦点を当てた。）
- 植物を選択する段階で、考えておく必要がある。
  - 植物の成長のどこに焦点を当てるかは、子どもが決めてよいのでは。
  - 育ちに焦点を当てるよりも、生活科では、野菜への興味・関心や、どのようにして野菜を育てるかということ、野菜を大切に思う気持ちを育てることの方が大切なのでは。
  - 生活体験の中から、どこに焦点を当てるかを考えさせても良いのでは。
  - 子どもからすると、「食べる」予定のあるところに注目するのでは。
  - 同じ植物のどこに焦点を当てるかではなく、違う植物と成長過程を比べる方が面白いのでは。たくさんの種類を育てるからこそ、比べられるのでは。

## まとめ概要

- 繰り返し野菜にかかわる活動があったからこそ、児童は野菜に親しみをもち、さまざまな気付きがあった。
- 活動を繰り返したり対象とのかかわりが深まったりすることに伴って、無自覚なものから自覚された気付きへ、一つ一つの気付きから関連された気付きへ、対象とかかわる自分自身への気付きへと質的に高まっていくことが大切である。児童の気づきを高めるために、ふり返り表現する機会を設定することや伝え合い交流する場を工夫すること、試行錯誤や繰り返す活動を設定すること、児童の多様性を生かすことが大切である。
- 生活科は学習指導要領に示されている9つの内容を2年間で指導することになっている。2年間を見通した年間活動計画を作成するとともに、児童の実態をとらえ、児童に身に付けさせたい力とそれに合った活動を設定し、児童の思いや願いが十分に生かされるよう指導計画を練ってほしい。
- 生活科では、児童が感動すること、達成感を得られることが大切。そのためには、教師の働きかけが大きな役割を持っている。
- 「種から種へ。命の連続性」を意識して活動を考えるのも良いのでは。